

[11] 「タイキ・フローラ」地元住民が参加した植物調査と植物標本作成 その2

白井 隆（一般社団法人 湿原研究所）
白井 温紀[○]（一般社団法人 湿原研究所）
佐々木 史江[○]（一般社団法人 湿原研究所）

北海道湖水地方の総合調査のため、地元住民を対象に、湿原や河畔林などの植物調査を目的に発足したグループ、「タイキ・フローラ」は活動 2 年目を迎えた。札幌市立大学の矢部和夫教授を顧問に、民間のナチュラルリストたちが集まり、自然の中で植物観察を楽しみながら、自然生態調査のセミプロを目指す意気込みで学習している。

2013 年 4 月の発足当時、「野の花が好き！」その一点で集まったメンバーは、まず、矢部教授の企画した「植物標本作成講座」に目を白黒させた。植物の調査は、植物の住民台帳を作るようなもの。一般の趣味人の多くは、散策で見つけた花の名前を図鑑で調べたり、切り花や押し花用に手折ったり、ということが主な楽しみだが、「タイキ・フローラ」では、どこに、どんな植物がいるのか、その証拠となる標本を作るため、植物を採取し、どんな状態で生きているのか、植物の成り立ちや生育環境を知ること、植物や自然界の面白さ、大切さを知るという楽しみ方を模索した。

また、足元の花を眺めるのに終始するのではなく、その花の咲く地域全体の環境に目を向けることで、数十メートル、数キロメートル四方の自然の成り立ちを観察する目を養い、人間の生活が自然に及ぼす影響にも気づくよう働きかけてきた。

一年目で何らかの成果物を作りたいと考えたが、作業量の多さに圧倒され、翌年に作業を継続することになった。

2014 年度に入り、「タイキ・フローラ」のメンバーを一般に公募した。

また、毎月継続している柏林講座と晩成学舎における学習の積み重ねが、参加者の意識を少しずつ豊かにする効果を生み、「タイキ・フローラ」ではあるが、ファウナに関心の視野が広がるようになった。ファウナから、フローラを振り返るという視点が加わったことも、大きな成果だろう。

今年度の冬には、近隣の博物館等を借りて、植物標本展示会を開催することが、当面の目標である。